

琉球新報社の歩み

明治26年(1893)	9月15日 ● 沖縄初の新聞「琉球新報」が創刊。初代社長は尚順
明治39年(1906)	4月1日 ● 日刊となる
昭和12年(1937)	7月 ● 那覇市松山町1-3(西武門)の新社屋に移転 12月20日 ● 政府指導により「琉球新報」は沖縄朝日新聞、沖縄日報と統合し新たに「沖縄新報」を設立。沖縄戦中も発行を続ける
昭和20年(1945)	5月25日 ● 首里城陥落とともに終刊 7月26日 ● 「ウルマ新報」(のち「うるま新報」と社名変更)が発刊される 9月10日 ● サンフランシスコ平和条約締結を機に社名を「琉球新報」に改める
昭和28年(1953)	1月1日 ● 共同通信社とニュース提供で契約
昭和29年(1954)	2月24日 ● 那覇市美栄橋区御成橋通りに新社屋が落成、移転
昭和36年(1961)	2月16日 ● 日本新聞協会に入会
昭和40年(1965)	1月 ● 那覇市下泉町2-8に地上4階、地下1階の新社屋が落成、移転
昭和44年(1969)	5月 ● 春開がこじれ、5月20日から6月3日まで新聞発行を停止
昭和46年(1971)	6月23日 ● 社屋を6階建てに増築(総面積7,129.99平方メートル)
昭和47年(1972)	6月1日 ● 共同通信社に会員社として正式に加盟
昭和54年(1979)	8月19日 ● 九州・沖縄地区初の超高速カラー・オフセット新聞印刷輪転機を設置
昭和58年(1983)	9月1日 ● 株式会社琉球新報開発を設立
昭和59年(1984)	3月1日 ● 名護市に北部本社を開設。伊江島、宮古、八重山、久米島など離島でも、夕刊の即日配達を実施
昭和60年(1985)	4月1日 ● 週刊「レキオ」を発刊。浦添支局を開設 4月28日 ● 第1回全日本トリアスロン宮古島大会を共催 5月1日 ● 株式会社「週刊レキオ社」設立
平成2年(1990)	7月1日 ● 「新報スポニチ」を発刊 8月24日 ● 「世界のウチナーンチュ大会」の「空手・古武道世界交流祭」を主催
平成3年(1991)	4月1日 ● バレットくもじに「なはバレットボード」開局 9月23日 ● 紙齢30,000号を数える
平成5年(1993)	9月15日 ● 創刊100年 10月9日 ● 第2土曜日付夕刊を廃止
平成6年(1994)	9月15日 ● これまでの縦題字を横題字に変更
平成8年(1996)	5月24日 ● 琉球新報ホームページを開設
平成9年(1997)	2月19日 ● 台湾最大の発行部数を誇る中国時報社と記事交換協定を締結
平成11年(1999)	11月15日 ● 那覇市天久に制作センター完成
平成13年(2001)	1月3日 ● 1975年以来25年ぶりに1月3日号を発行
平成14年(2002)	4月13日 ● 石垣島トリアスロン大会を共催 5月1日 ● 編集局がワシントンDCに契約駐在記者を配置
平成15年(2003)	11月11日 ● グローバリゼーション・フォーラム開催。ゴルバチョフ元ソ連大統領ら日・米・露・中・韓の政治家、識者が那覇に集う
平成17年(2005)	3月15日 ● 那覇市天久に新社屋完成 4月20日 ● 天久新社屋に琉球新報新聞博物館が開館
平成20年(2008)	11月1日 ● 日本経済新聞の受託印刷が始まる
平成21年(2009)	2月28日 ● 最後の夕刊を発行、55年の歴史に幕 3月1日 ● 朝夕刊統合に伴う「新朝刊」がスタート
平成23年(2011)	1月9日 ● 新報小中学生新聞「りゅうPON!」の発行開始
平成25年(2013)	● 本社ビル壁面に電光掲示板「りゅうちゃんボード」を設置
平成27年(2015)	5月18日 ● 沖縄タイムス社と提携し、北部地区の販売店への共同配達を開始 7月1日 ● 日本農業新聞の受託印刷を開始 7月11日 ● 沖縄県と米ハワイ州の姉妹都市締結30年を記念してハワイで移動編集局を開催



2018年春完成予定の琉球新報新本社ビル

琉球新報社

本社 / 〒900-8525 沖縄県那覇市天久905
TEL 098-865-5111(代表) FAX 098-861-0100

中部支社 / 〒904-0014 沖縄県沖縄市仲宗根町25-6
TEL 098-934-6500

北部支社 / 〒905-0014 沖縄県名護市港2丁目3-1
TEL 0980-53-3131

東京支社 / 〒104-0061 東京都中央区銀座4-9-6 陽光銀座三原橋ビル3階
TEL 03-6264-0981 FAX 03-6264-0982

大阪支社 / 〒530-0003 大阪府大阪市北区堂島2-1-2 中村屋ビル4階
TEL 06-6346-5537 FAX 06-6346-5538

福岡支社 / 〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神2-8-30
福岡天神西通りビジネスセンター8階
TEL 092-761-4818 FAX 092-761-7301

【琉球新報社の関連会社】

株琉球新報開発 / 〒900-0001 沖縄県那覇市港町2-16-1
琉球新報開発ビル7階
TEL 098-865-5262

株琉球新報発送 / 〒900-0005 沖縄県那覇市天久905
TEL 098-860-6779(代表)

株新星出版社 / 〒900-0001 沖縄県那覇市港町2-16-1
琉球新報開発ビル4階
TEL 098-866-0741(代表)



琉球新報ホームページ <http://ryukyushimpo.jp>
琉球新報Styleホームページ <https://ryukyushimpo.jp/style>



琉球新報社

The Ryukyu Shimpo | Recruit 2017

沖縄の
元気な
新聞社。

01

編集局

沖縄の“今”を世界に伝える。

報道本部

政治部 / 経済部 / 社会部 / 文化部 / 運動部 / 地方連絡部 / 南部報道部
写真映像部 / NIE 推進室 / 調査オピニオン / ワシントン特派員

ニュース編成センター

整理グループ / 校閲グループ / デザイングループ



就活生へエール!

僕の入社動機は「いろいろな人に出会い、いろいろな話を聞いて、毎日が昨日と違う生活を送り、故郷の社会とつながることができ、しかも給料をもらえるなんて、なかなかいい仕事だな」と思ったことです。実際はそんなに甘いものではないのですが、エントリーシートを書いた時に思ったことは間違っていないと思います。まずは自分の好奇心と探求心を頼りに飛び込んでみてください。

たどり着けた事実をいち早く届けたい

島袋 良太 ■ 政治部

基地問題を担当しています。取材相手は県庁や防衛省、外務省、米軍など多岐にわたりますが、米軍基地を多く抱える中部支社に勤務していた経験から、基地問題を政治問題ではなく身近な生活に深く関わる問題だという軸を大切に、取材に臨んでいます。

これまでさまざまな部署で喜怒哀楽にあふれる取材現場を経験してきました。ただ国土面積の約1%に在日米軍専用施設の7割が集まる沖縄の政治課題であり続けてきた基地問題については、なかなかそうもいかず、最近はいかめっ面で記事を書いてばかりなのが事実です。

しかしその分、独自の調べ物による取材などを通して、日の当たることがなかった事実を掘

り起こしたり、世間の大きな関心事となっている問題の動向をいち早く読者に伝えることができたりした時は、胸の中が勝手に沸き立つようなやりがいを感じます。

長い時間をかけて居場所を探しても取材相手が重い口を開かなかったり、一日中資料を読み続けたり、取材相手からより深い話を引き出せるように事前勉強をしたり、政治記者の仕事は多くが地味なことです。

しかし集めた事実の積み重ねが、ニュースを構成する大切な要素です。月並みな言い方ですが、そうしてたどり着けた重要な事実を読者に届けることができた瞬間が、この仕事の最大の魅力です。



米国防務時の休日に昼からビールを飲んでくつろぐ。隣は愛娘

しまぶろく・りょうた [2007年入社]

- 出身：沖縄県那覇市
- 社歴：写真部→社会部→経済部→中部報道部→ワシントン特派員→政治部
- 趣味：魚釣り
- オフの過ごし方：コーヒー焙煎、ペランダ菜園、釣り、模合。なんとか時間をつくって旅行もします



就活生へエール!

「社会を良くしたい」という思いを原動力に働ける、やりがいのある仕事です。人が好きな人、タフな人、ぜひ一緒に働きましょう。

母だからこそできる取材があると信じて

岩崎 みどり ■ 社会部

「おやじの機嫌が悪いとよく殴られた」「おなかが減ると、隣り町で暮らす父親のアパートに歩いて行った」。昨年、「子どもの貧困取材班」として貧困状態の家庭に育つ子どもたちから話を聞きました。余りにも過酷な現状に、涙をこらえながら取材することもありました。

現状や課題を伝える連載を軸に県の動きなどを次々と記事化しました。一連の報道が、県民会議の発足など全県的な動きを後押ししたと思っています。と同時に、今後も関わっていく責任を感じています。

社会部のフリー記者として、毎日いろいろな取材をしています。例えば、新しい米大統領に対する県民の要望を聞いたり、公

民館の催しを見に行ったり…。生活に関わる全般が対象になります。日々の取材をこなしながら、関心がある事を追っていくのが醍醐味です。

家では3人の子の母親。記者をしながらの子育ては、綱渡りの連続です。「もう辞めよう」と思ったこともあります。そのたびに先輩や同僚に支えられてきました。子どももがいて、事件事故の発生時に駆けつけられないのは、記者として本当につらいことです。それでも、子育ての楽しさ、大変さを知っているからこそできる取材があると信じています。



楽しい取材には子どもを連れて行くことも。待ち時間にボールを投げて遊んでいる様子

いわさき・みどり [1999年入社]

- 出身：東京都
- 社歴：中部支社→社会部教育担当→文化部生活班→整理部→副読紙「週刊レキオ」担当→社会部
- 趣味：読書。最近水泳を習い始めた
- オフの過ごし方：娘の部活動のフログ作り

プレーヤーとなって沖縄観光の宣伝も

呉 俐君 ■ 経済部

経済部の中では、金融や情報通信（IT）、物流、農業、観光などさまざまな専門分野に分かれています。私は観光産業を中心に取材しています。これまで沖縄観光の国際化に向けた県内の受入環境の課題や解決策などを丹念に紙面で取り上げ、沖縄観光の成長とともに歩んできたと思います。

取材では人の話を聞くだけでなく、実際に体験することも大切です。2016年に韓国観光公社の視察旅行で訪れた釜山のメディカルストリートで、タンパク質で作られた「埋線」をはりて脇腹に埋める施術を受けました。はりがツボを刺激し、筋肉と肌の再生を導き「くびれがきれいに見える」という触れ込みで、麻酔なしの施術は激しい痛みを感じまし

たが、心なしかすっきりしたような…。

沖縄観光の魅力在海外に売り込むため、営業局とともに台湾でタフroid紙も発行。現地での市場調査や、発行に当たってのコーディネートなども手掛けました。16年7月に第1号が発行され、台北市内のファミリーマート600店舗で配布しました。紙面で観光の実態を伝えるだけでなく、実際にプレーヤーとして沖縄観光を宣伝することは、観光担当記者として最もやりがいを感じる仕事でした。

外国人記者として言語力を発揮できる台湾や中国、韓国への出張も多く、取材先との関係を今でも密接にしています。世界のどこに行っても友達が待っているということが、この仕事の一歩面白いところではないでしょうか。



就活生へエール!

怖がらず、恐れず、自分の人生は自分で切り開いていく。ハードルが高いと思われがちな新聞社、あなたが知らないわくわくな世界があります。

ウ・リジュン [2012年入社]

- 出身：台湾 高雄市
- 社歴：政治部→経済部
- 趣味：ベリーダンス、ハイキングなど
- オフの過ごし方：ジムで汗を流した後、シンガポールの友人などと食事したり、日本語を使わない楽しいことでリフレッシュする。3日間以上の連休があれば、台湾など海外旅行も



夏休みに米・オレゴン州の友人を訪ねて、ハイキングのすがすがしい汗を流すために(笑)

新聞で学ぶ講座開発 「生きる力」育む

東江 亜季子 ■ NIE 推進室

中学、高校、大学生だった時、あなたは新聞を手に取り、目を通していましたか？ 私は正直言うと「たまに」です。最近、学校に行くと聞くと学級で3、4人手を挙げるかな〜という感触です。

私は中学1年生の頃にガラケーの携帯電話を持ち始めましたが、当時にしては早い方でした。今ではテクノロジーはどんどん進んで、みなさんがあと10歳年を取れば、人工知能（AI）が、みなさんの仕事を取って代わるかもしれません。

人間らしく感情的になったり、頭をフル回転させ、じっくり思考したり。そんな人間っぽい生き方を大切にしたいなあと最近、思いを強くしています。

人の生き方と共にあるのが新聞一。

18歳選挙が始まった2016年、高校生が新聞記事を読んで社会への提案を考える「主権者教育」の講座を開発しました。トランプ米大統領の勝利が決まったその年、世界が、そして私の友人もSNS上で「フェイクニュース」にほろろうされているのが目に見えました。デジタルネイティブの先駆けとして育った世代の一人として「メディアリテラシー講座」も作り、県内の高校などに出向いて授業をしています。

新聞社が社会に伝えられる価値は記事だけじゃないと思っています。沖縄の地に足を付け、視野を世界に。無限の将来を着実に歩む子どもたちの力になりたいです。



県内の学校で新聞を使った多様な講座を展開！子どもたちや先生の声が開ける貴重な機会です

あがりえ・あきこ [2012年入社]

- 出身：沖縄県那覇市
- 社歴：文化部生活班→中部報道部→NIE推進室
- 趣味：ダンス。次は何の資格を取るか考えること、旅、カラオケ
- オフの過ごし方：午前は英語の通訳講座。午後はダンススタジオや劇団でのダンス指導。気が向いたらジムで筋トレ。カフェで自分の人生と向き合う時間を作ったり、元気があつた夜はクラブでダンス



就活生へエール!

スタートアップの企業で働いているかのように「行動型」「提案型」の人と一緒に仕事をしたいです。言葉や思いに行動をつけてくださる。未開の分野を切り開くことをワクワク楽しみ、互いのキャリアアップも一緒に目指しましょう。

01 編集局

編集綱領

公正、迅速、品格を保ち、健全なる世論を育成する。

沖縄の諸問題を解明し、経済の発展、文化の向上と民主福祉の充実につくす。

世界平和の確立と民主社会の建設に寄与する。

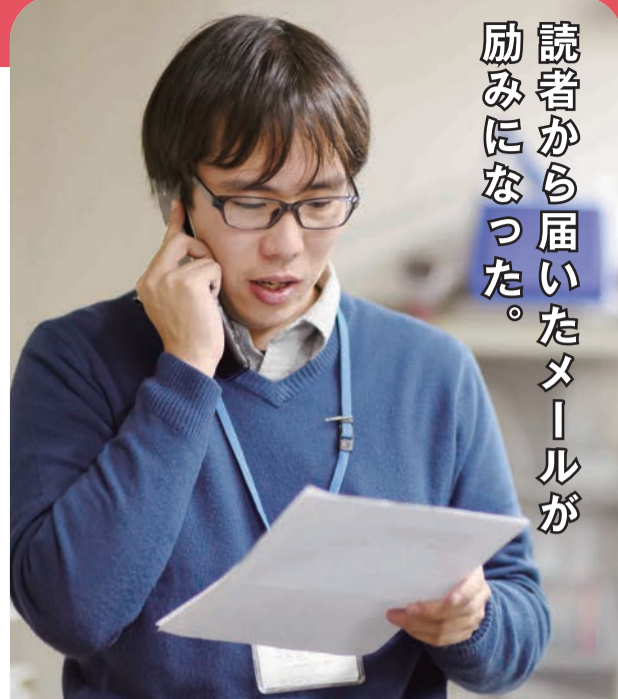
主な受賞歴

- 1978 **新聞協会賞「写真部門」**
中国漁船団による尖閣諸島海域の領海侵犯事件
- 1985 **アップジョン医学記事賞特別賞**
連載「子供たちの赤信号—学校保健室はいま」
- 1988 **農業ジャーナリスト賞**
連載「沖縄農業の最先端」
- 1990 **九州写真記者協会賞**
「動物に見る親の情」
- 1991 **九州写真記者協会賞**
「ケラマジカ群の夜間撮影に成功」
- 1994 **農業ジャーナリスト賞**
連載「虫とたたかった男たち」
- 1995 **九州写真記者協会賞ニュース部門賞**
「ネコとマンガース」
- 1996 **新聞労連ジャーナリスト大賞**
「異議申し立て基地沖縄」
- 1998 **新聞協会賞**
「検証・老人デイケア」キャンペーン
- 2003 **新聞労連ジャーナリスト大賞**
平和・協働ジャーナリスト基金(PCJF)賞奨励賞
「軍事基地と住民—国外から沖縄を問う」
- 2004 **石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞**
「検証 地位協定～不平等の源流」
- 2005 **新聞協会賞**
石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞
戦後60年企画「沖縄戦新聞」
- 2008 **新聞労連ジャーナリスト大賞**
「集団自決をめぐる教科書検定問題」報道
- 2010 **平和・協働ジャーナリスト基金奨励賞**
与那嶺路代ワシントン特派員
- 2011 **新聞労連ジャーナリスト大賞**
高知新聞と連携した
「普天間飛行場問題の本質に迫る報道」
ファイザー医学記事賞優秀賞
連載「それぞれの歩幅で～発達支援を考える」
平和・協働ジャーナリスト基金奨励賞
「ひずみの構造—基地と沖縄経済」
- 2012 **新聞労連ジャーナリスト大賞**
「米軍普天間飛行場返還・移設問題をめぐる
沖縄防衛局長による不適切発言の報道」
- 2013 **新聞労連ジャーナリズム大賞特別賞**
「米海兵隊のオスプレイ配備に抗う一連の報道」
新聞協会賞
琉球新報・山陰中央新報合同企画「環りの海」
- 2014 **新聞労連ジャーナリズム優秀賞**
「沖縄の不条理を突く
4.28「主権回復の日」に関する一連の報道」
定田桂一郎賞
当銘寿夫記者「A級戦犯ラジオ番組で語る」
連載「原発事故とウチナーンチュ」
平和・協働ジャーナリスト基金賞大賞
連載「日米週り舞台—検証フテンマ」
- 2015 **新聞労連ジャーナリズム大賞**
「普天間・辺野古問題」を中心に
この国の民主主義を問う一連の報道キャンペーン
石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞
「沖縄の自己決定権を問う一連のキャンペーン報道
～連載「道標（しるべ）求めて」を中心に～」
- 2016 **新聞労連ジャーナリズム大賞特別賞**
「報道圧力」問題をめぐる一連の報道と対応



社会を変える力になりたい。

2016年度入社先輩の声



塚崎 昇平 ■ 文化部
つかざき・しろうへい / 大分県宇佐市出身
趣味：映画と落語鑑賞

読者から届いたメールが
励みになった。

私は文化部の教育班に所属しています。県教育委員会の取材がメインですが、学校での特徴的な授業や、文化活動などで活躍する子どもたちなどを取り上げることも少なくありません。

文部科学省の調査で、沖縄の小学生の徒歩登校率が全国で最も低いことが分かったときは、対策を進める県教委だけでなく、保護者や学校も取材し、学校への自家用車での送迎が多い実態と、その背景に不審者への懸念があることを記事で伝えました。記事の掲載後、読者の方から「県民の健康意識への警鐘になった」とのメールをいただき、うれしく思いました。

【2017年1月4日付1面】



志望動機

学生時代は安全保障問題の研究をしながら、名護市辺野古や東村高江など「安保の現場」にさせられている土地を訪ね、国会や政府内での「机上」の議論と、現場で声を上げる人々の「生の」議論が余りにもかけ離れていると感じていました。そうしたギャップを丁寧に描き出して、政策を決める場でも「生の」議論をできる一助になりたいと考えていました。

全国の新聞社と記事や記者の交換が盛んな琉球新報であれば、沖縄の「現場」からの情報を全国や世界へと発信していけると考え、入社を決めました。

入社後に驚いたことは？

意外と土日の休みが多い。

10年後はどんな自分になっていた？

「人生の転機になった」「生きる力をもらった」と言ってもらえるような記事を書けるようになりたい。そのためにも、取材相手の気持ちに寄り添い、同じ目線に立てるように、取材を重ねていきたいと考えています。あと、私生活も充実させたいですね（笑）。



半嶺 わかな ■ 社会部
はんみね・わかな / 沖縄県与那原町出身
趣味：旅行、公共交通機関を使った歩歩き

みんなが生きやすい社会
考えるきっかけに。

仕事や趣味に輝く、障がいのある人を紹介するコーナーを担当していたため、障がいのある人を取材することが多かったです。特に印象に残っているのは盲ろう者友の会の宮里進会長にインタビューした記事。外出時に盲ろう者に付き添う通訳介助員の存在の大きさと、盲ろう者に情報を保障するための社会の課題を聞ききました。

記事にするだけでは盲ろう者の状況を変える事はできないし、新聞だって目が見えない人には情報を届けにくい。それでも読者が少しでも障がいのある人の生活を想像し、みんなが生きやすい社会を目指すにはどうすればいいか考えるきっかけになればと思い、悩みながら書きました。

【2016年10月4日付琉球】



志望動機

新聞記者はたくさんの人に会い、社会の「なぜ」を追求する仕事。仕事内容に興味をひかれたから。琉球新報の記事に「いいな」と思うことが多かったから。

私は文章を書くのが苦手です。新聞記者は書くのが仕事なので「自分は書けないから新聞記者は無理かな」と思っていたのですが、ある先輩に「新聞記者の仕事の8割は取材。書くのは2割だ」と言われて、それならば入社後に勉強していけばいいのかなと思って、新聞記者を目指すことにしました。

入社後に驚いたことは？

真面目で硬くて怖い男の人ばかりだと思っていたけど、現在所属する社会部は半分が女性記者で、性別・年齢・役職問わず話しやすい人ばかりでした。

10年後はどんな自分になっていた？

一人前の記者！ どんなに小さな声も見落とさなくて、世の中の「当たり前」に縛られない記事を書ける記者になりたい。



嘉数 陽 ■ 社会部
かかず・よう / 沖縄県那覇市出身
趣味：飲む、花屋めぐり

自信取り戻させてくれた
教え子たちの言葉。

那覇市内の指定避難所の中に、耐震性を確保していない建物が多数含まれていることを記事化しました。その全てが小中学校の体育館であり、避難所としてだけではなく、教育施設の安全性も確保されていないことを指摘しました。記事化したことに後悔はありませんが、耐震性の確保は法に明記されておらず「法律に違反していないのに記事にするのか」と数人から疑問を投げ掛けられました。

私は入社前、5年間小学校に勤務していました。記事が出た後、教え子の授業参観に出かけたとき、子どもたちが「学校のこと書いてでしょ」と寄ってきました。「守られている気がした。自分たちのこと忘れないでね」と言われ、思わず涙が出そうになりました。法は犯していないでも、問題提起したことは間違っていないかと自信を持ってました。法はもちろんですが、人命を最優先に考え続けたいと思います。

【2017年2月9日付1面】



志望動機

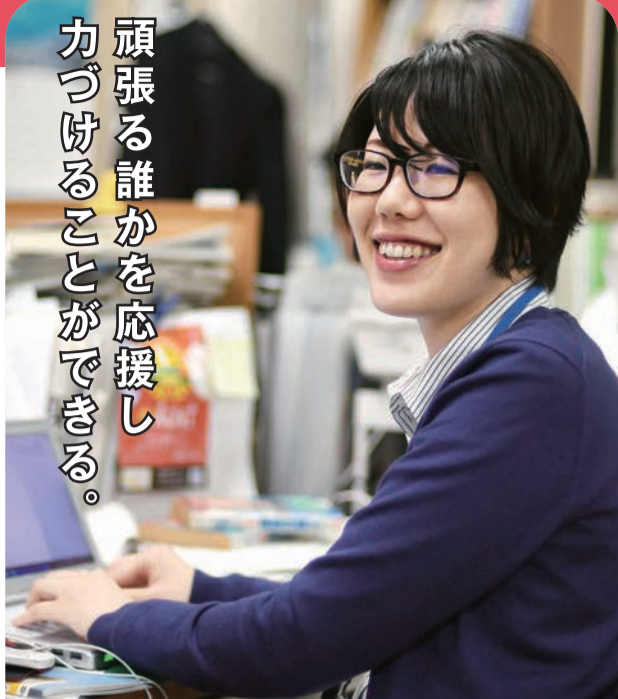
将来にわたって、人の役に立てる仕事だと思います。琉球新報は、読んでいておられることなく、冷静に自分のペースで考えることができたので選びました。

入社後に驚いたことは？

キャリアに関係なく、忌憚（きたん）のない意見交換ができます。個人的な先入観でしたが、入社前は「人の意見なんて先輩方に聞いてもらえないのでは」と思い込んでいました。いざ話し合いの席に着くと全くそんなことはなくて、すぐに同じ記者として扱われ、意見を求められました。プレッシャーはもちろんです。その分成長につながると思うので楽しいです。

10年後はどんな自分になっていた？

新卒者よりかなり遅い、31歳で入社しました。10年後は41歳。まだ現役記者でいたいです。



赤嶺 可有 ■ 政治部
あかみね・こう / 沖縄県豊見城市出身
趣味：犬の動画を見る、散歩、長風呂

頑張る誰かを応援し
力づけることができる。

政治部に所属しており、県政の中で道路や下水道、県営住宅など土木建築部の話題について主に担当しています。

県営住宅は所得の低い沖縄で貴重なセーフティーネットとなっている一方、それでも家賃を払いすぎず、退去を余儀なくされる人も後を絶ちません。事態を重く見た県は相談窓口を設置しました。困窮者の「最後のとりで」をなくさないよう奮闘していることについて記事にしました。

掲載後、取材先から丁寧なお礼の言葉があり、「これからも頑張るよ」と力強い笑顔を見せてくれました。記者は頑張っている人と一緒に何かをするわけではないですが、その人を応援し、力付けることができるのではないかと思います。

【2017年1月4日付2面】



志望動機

沖縄の将来に責任を持ちたいと思ってきました。記者になれば、戦争トラウマや貧困問題、本土との格差、基地問題など幅広く沖縄の課題にアプローチでき、少しでも解決策が見つけれられるんじゃないかと考えたのが目指すきっかけです。

琉球新報は誠実ながら親しみやすい社員が多く、一緒に働けたら毎日楽しそうだと思います。応募を決めました。

入社後に驚いたことは？

新聞業界は怒号が飛び交っているものだと思っていたのですが、怒号じゃなくお菓子や飲み物が飛び交っていました。お酒が好きな人も多いけど、無理矢理飲ませることもないです。県外出身者や女性も多い、明るい職場です。

10年後はどんな自分になっていた？

まわりの人に選択肢を与えることができる人でありたいです。困っている人は、自分が困っているとは言わなかったりします。相手の困っていることに気付き、背景を整理し、寄り添えるような記者になりたい。

02

営業局

アイデアと熱意で勝負！

広告部

営業グループ/制作グループ/プロジェクトチーム

事業開発部

管理部

企画広告のヒントは日常に落ちている

宮里 正剛 ■ 広告部/営業グループ

新聞記事の下の広告スペースを販売しています。新聞社の経営を支える非常に重要な仕事の一つです。東京、大阪にも支社があるので、県外で働いてみたいという方にもおすすめ。「ザギン」でも働けますよ。

企画広告は、広告主のニーズに合致していれば何でもありです。自分の趣味を活かした企画でも構いません。私はゴルフが趣味なので、どうにかゴルフを絡めた企画をしたいと勝手に考えています。せっかくなら楽しみながら仕事をしたいですね。

入社2年目のときに先輩と一緒にガラケーからスマホに機種変更を促す「沖縄セルラープレゼンツ きしゅへんロックンロール」という企画を立ち上げました。40代の方々が本屋でスマホに関する本を立ち読みしている姿

見て「この世代もスマホに変えたいんだな」と感じたのがきっかけです。社に戻ると先輩が「ラジオで聞いたけど、みーかーのガラケーが故障したらしい。スマホにしてもらおうか!」とのアイデアが飛び出してきました。その勢いそのまま企画書を仕上げ、ラジオ沖縄とのコラボ企画ということで沖縄セルラー電話様に提案したところ、採用されました。

いろいろな所にアイデアやヒントが落ちています。それを見つけることが仕事だと考えると面白い。何気ないアイデアが紙面を通して読者に届けられ、反響をいただいたときには喜びを感じます。みなさんの柔軟かつぶっ飛んだアイデアで沖縄を盛り上げましょう!

※ラジオパーソナリティの玉城美香さん



みやざと・まさたか [2013年入社]

- 出身：沖縄県南風原町
- 社歴：旧広告局営業部-広告部営業グループ
- 趣味：ゴルフ
- オフの過ごし方：家族で外出したり、友人や先輩たちとゴルフ。最近、ミニトマトの栽培を始めました。日当たりが悪いアパートに住んでいるので育つ心配。次の引っ越し先は日当たりの良い場所を希望!

就活生へエール!

新聞社といえば「記者」のイメージが強いと思いますが普通の会社です。営業、総務、事業など多くの業務があり、どれも魅力的な仕事ばかりです(たぶん)。自分の知らない才能が発揮されるかもしれませんね。どの会社でもそうですが、体力は必要です。フルマラソン3回以上は完走していた方が良いでしょう。

多彩なイベント開催へ試行錯誤の日々

比嘉 研二 ■ 事業開発部

事業開発部は「イベントを生み出す部署」です。単発イベントの他にも2016年に開催580回を超えた「新報料理講習会」など継続して行っている事業が多いのも特徴です。企画立案から集客のための告知、事前調整、当日運営、事後処理、お金の精算まで一連の業務を担うので、組織にしながら個人事業主のような経験ができます(笑)。

これまで担当した事業を振り返ると、自分でもその幅広さに驚きました。農漁業体験などの食育関連事業や、地元客だけでなく観光客にも好評の「首里城祭」「中秋の宴」、連日大盛況だった「やなせたかしの世界展」「宇宙散歩 by MEGASTAR」「木下大サーカス」、毎年恒例の「巨人オープン戦」や若者に人気だった「パブルラン」など。皆さんも

一度は足を運んだり聞いたりしたことのあるイベントがあったのではないのでしょうか?

私も入社前は見に行く側でしたが、今では企画運営する側となり、新聞社ってこんなこともやってたんだと日々驚きの連続です。

幅広いジャンルで様々な経験ができ、知識が増えることも魅力です。県外のイベントにも目を向けて交渉し沖縄開催にこぎつけるなど、やる気があればやりたいことが実現できる環境にあると思います。

事務作業も多く仕込みも何カ月単位と、華やかさの裏には見えない苦労もありますが、お客さまの喜んでる姿が見え、嬉しい言葉をいただく疲れが吹き飛びます。これからもアンテナを張り、試行錯誤しながら楽しいイベントを作り上げる日々が続きます。

ひが・けんじ [2014年入社]

- 出身：沖縄県那覇市
- 職歴：旧事業局開発事業部-事業開発部
- 趣味：食べ飲み歩き、野球
- オフの過ごし方：美味しいものを食べ飲み、たまに野球やサッカー。季節のイベントには足を運ぶようにしています

就活生へエール!

幅広い分野で様々な物事に接することができるので、好奇心旺盛の方にはピッタリだと思います! 夏休みや冬休みなどの連休に楽しんでもらえるコンテンツを作り、提供できると考えるとワクワクしてくると思います。夢と希望を与えられる楽しいイベントと一緒に作り上げましょう!



Works

1. 新生活応援特集
2. GW特集
3. 新報夏ナビ!
4. プロ野球キャンプ特集
5. きしゅへんロックンロール

現役部員に聞きました!

同じ営業局の中でも、広告部と事業開発部は仕事の内容が全然違う。広告部・営業グループの皆さんは、一体どんな人たち?

Q1 広告部員に必要なものは?

何はなくてもコミュニケーション能力。
挨拶もお付き合いも、営業の基本。相手との信頼関係を築くためにも必要不可欠です。

元気! 体力!
元気があればなんでもできる! 何事も勢いが大事です!

相手との粘り強い交渉を支えるタフな心。
営業の極意は粘り腰。折れない心でもうワンプッシュ。

Q2 アフター5は何をする?

ゴルフのレッスン!
野球は卒業しました。今はとにかくゴルフがチョー楽しい!

気になるお店に通いつめています。
営業マンには心のオアシスが必要なんです。

ポケモンGO。
ほくもいい年ですから運動も兼ねてね... っってちょっと、これ、載せないでよ!?

Q3 学生のうちにやっておいた方が良いことは?

バイトと合コン。とにかく遊ぶ!
学生時代の経験は何でもこやしになる。今のうちにトライ&トライ!

何でもいから打ち込んでみたら?
熱中できるものがあるってし・あ・わ・せ♥

アルバイト。働くことを体験して。
バイトで培った判断力や創意工夫するスキルは就職後も生きますよ。

Works

1. 宇宙散歩 by MEGASTAR
2. 首里城祭の古式行列
3. パブルラン2016 in 沖縄
4. 新報料理講習会
5. プロ野球 巨人オープン戦



現役部員に聞きました!

事業開発部はイベントのプロ。広告部と同じく収益を上げることが大目標だけど、仕事の極意はお隣さんとちょっと違うよう...

Q1 事業開発部員に必要なものは?

相手の懐に入る勇気と何があっても動じない心。
そのためには体力も精神力もパッションも遊び心も酒も必要です。

自分は晴れ男・晴れ女という根拠のない自信。
イベントは天気か命。スタッフの中に雨人間がいるときは全力で戦う。

強運を呼び寄せるための日頃の善行でしょうか(笑)
どんなに準備しても結構、運に左右されます。今から強運を味方につけましょう。

Q2 アフター5は何をする?

家族と過ごしつつお楽しみは家ビール♥
家族LOVE♥ビールLOVE♥至福のひとつです。

走ってます。10kmぐらいかな?
以前はキックボクシングを少々。先輩方に驚かれます(笑)

早く終われば野球! 残業のお供はもろみ酢!
野球はいいですよ。もろみ酢は机の上に常備です。

Q3 学生のうちにやっておいた方が良いことは?

長期海外旅行!!
採用が決まれば3月から研修が始まります。旅行は2月までに行くべし! 私は今でも後悔しています。

友達をたくさん作ろう。
仕事にもつながるから人脈って大事。県外出張のときは遊び相手にも。

腐れ縁は切っておけ。
半分冗談。半分本気。みんな、もう俺に酒をたからないで!

03

読者事業局

新聞と読者をつなぎ地域を元気に。

販売第一部
販売第二部（中部支社・北部支社）
読者事業部
文化事業推進部
管理部
出版部

入り口は人それぞれ。 読者事業局の仕事の魅力は？

滝本 入社前から、新聞社にこんなにいるんな業務があるって想像してた？

伊波 整理部¹とか想像もしてなかった。新聞にレイアウトの仕事があるなんて。

滝本 「トップ・肩・腹」²なんて新聞の常識も実は昨日、飲み会で知ったの（笑）。

伊波 編集局の同期たちが、やたらピーコ³の話をするから「なんで、おすぎとピーコの話ばかりするんだろ？」って（笑）。

銘苅 私は記者志望だったのに旧販売局に配属されて「販売って何するの？」って（笑）。

滝本 私は今、読者事業部で児童五輪やパークゴルフ大会などのスポーツイベントや、褒賞行事、共催事業などを担当している。主催団体は別にして、紙面で取り上げてバックアップするのも仕事の一つ。

伊波 主催以外も合わせると年間何百件とあるよね。1日1件以上のペースでしょ。

滝本 辛いのは炎天下ののぼり立て。

一同（笑）

滝本 でも現場でおじいちゃん、おばあちゃん笑顔や頑張っている子どもたちの姿を見ると、やっぱりうれしい。喜んでもらって新聞購読につなげたいよね。

来問 私は同じ読者事業部の中でも、より販売促進につなげるPRを前面に出したイベントやキャンペーンを主に行っていますね。あと、スポンサー契約をしているスポーツチームの冠試合⁴とか。

銘苅 私がいる文化推進事業部は、古典芸

能コンクールや国際バレエコンクールを主催するなど、県内の芸能文化の後押しをする部署。その団体だけではできない部分を、新聞社として担っています。私の担当する国際バレエコンクールは、県内唯一の登竜門なので、沖縄でバレエをやっている子達には、貴重な機会になっていると思う。

滝本 私たちの事業って新聞社独特。他のメディアで、ここまで社会貢献事業をやっているところってないんじゃないかな。

銘苅 コンクールの合格発表の時に涙を流して喜んでいる受験者の姿を見ると、このイベントの価値を再認識するんですよ。本当に「ふえ〜」と声をあげて泣く子もいて。そういうのを見ると、頑張っているための目標になっているんだと思う。

森山 そうなんだよね。書き初めてでもスポーツでも、結果残すために子どもたちみんな一生懸命頑張ってるんだよね。

伊波 収益重視ではない、うちの局がやる事業だからこそ意義がありますね。

伊波 母の日の図画作文コンクールや幼児画コンクールって、自分もそうなんだけど、小さい頃に賞状をもらったり表彰式に行ったりした記憶は、大人になっても残っている。

来問 オレは「新1年生の集い」に行ったのを覚えているなあ。

森山 私も！すごい面白かった記憶がある。

滝本 小さい頃から琉球新報に親しんでもらうきっかけになるよね。新聞も読んで、新報ファンになってもらうための。

来問 それでいくと、オレは将棋大会がやりたい。裾野を広げるっていうのは、新聞社がやる意義があると思うんだよね。その

団体だけでやるより、新聞社が絡むことでより大掛かりな展開ができるし、大会で優勝して自分の子どもが新聞に載ると、喜んでもらえるでしょう。

滝本 だから、新聞社とイベントをやりたいという話は多いですよ。

来問 将棋大会やりたいのは、すごく個人的な理由なんですけど。息子が将棋にはまっているっていうのと、テレビで「3月のライオン」っていう将棋アニメをやってて、これがすごく心に刺さる作品ですもん。

一同（笑）

来問 で、今年の1月に那覇市で開かれた

将棋大会に親子で出たら、結構人もたくさん来ててさ、「あれ、将棋ってこんなに人来るの？」って驚いたんだよね。息子が通う将棋サークルの先生と話すと、沖縄からはプロ棋士が出てない。

滝本 囲碁は知念かおりさんがいるけどね。

来問 沖縄にもレベル高い子はいっぱいいるから、もっと裾野が広がったら沖縄からもプロが出せるという話をしている。そこに新聞も絡めるんじゃないかな、と。それはいろんな分野に言えると思う。裾野が広がれば突出した才能を見つけることができるんじゃないかな。それを応援したい。

肌で感じる1部の重み。 新聞社の屋台骨です。

伊波 私は管理部で、販売店に出す請求書を作成したり、各所で必要な新聞を確保したり、毎日数字を見ている。自分がミスをするので緊張感がありますよ。

森山 私は販売第一部で、販売店の管理指導をしています。毎月、販売店が扱う部数の増減の要因を店主さんと話し合っ、必要なときはアドバイスしたり指導したり。

銘苅 販売政策にどんな意義があるか、販売店さんに説明したりもするよね。

森山 来問さんの部署が考えた販促キャンペーンを販売店さんにも協力してもらって

います。本社と販売店はメーカーとディーラーの関係。販売店が元気じゃないと本社の元気もなくなる。販売店の意見も取り入れながら、二人三脚で一緒に頑張ろうって感じですね。

伊波 販売店が読者の声を直接聞いて、本社に伝えてくれることもよくあるよね。

森山 販売店が苦労して取った1部の話を聞くこと、私たちもうれしい。逆に、本社の対応が原因で部数が減ったりすると販売店さんにすごく恨まれますよ（笑）。1部の重みを肌で感じられる仕事ですね。

来問 あと、うちの局ってみんなでカバーし合えるから、休みが取りやすいってのも言えるよね。育児中の男性社員もいるし。

滝本 それは全体的に言えると思う。

銘苅 確かに、編集にいた頃と比べると時



間的な拘束はそれほどない。繁忙期は大変ですけど、ちゃんと代休も取れますし。

伊波 管理部は月のサイクルで仕事の流れが決まっているので、自分で調整しやすい。慣れれば趣味と両立もできますよ。

滝本 夕子は書道とかお茶とか、ヨガもやっ

てるよね。

伊波 全部インドアですけど（笑）。

滝本 まあでも、仕事もプライベートも充実させるのって、その人次第じゃない？どこで働いていても、効率良く仕事する人はオフも楽しんでるように見えるな。

やりたいことができる。 特に女性はのびのびと（笑）

森山 女性の方が「それはおかしい」とかはっきり伝えることができる気がしますよね。古い慣例にも「ノー」と言えるというか。女性がすごくのびのびしてるなあって思う。

来問 最近の若い人はかなり男女平等が浸透してるから「男だけど力仕事やりません」って人もたまにいるけど（笑）。でも女性が自由なのは感じる。

滝本 まあ私も TENT 立てたり力仕事したり、それなりに全部こなしているからね。

伊波 この仕事はどんな人が向いている？

来問 周りが見えない人。良い意味で猪突猛進というか、突っ走れる人。

滝本 結構フリーズしちゃう若い子って多いよね。何か問題にぶつかった時に先に進めなくなるの。「一つボタンを外せば楽になるのにな」っていうような子が多い。

来問 自分から動くこうとする人は、周りから軌道修正してあげられるんだけど、動くこうしない人は軌道修正もできない。そう

いう意味では、がむしゃらさは大切な。

銘苅 自分の部署の仕事じゃないんですけど、キングスの冠試合のときも、いかにキングスファンに琉球新報をアピールするか考えたりするのが楽しい。部の垣根を越えていろいろできる自由さはありますよね。

伊波 つばきがやっている「キングス応援バスツアー」のガイドなんて、まさに…

銘苅 趣味と実益（笑）。好きなことができる仕事ですよ〜。

森山 これやりたいって企画は結構やりやすいですよ。読者事業局の場合、販促に繋がるなら、かなり自由ができる。

滝本 まあ、やりたいことやするには、自分の持ち場の仕事もしっかりこなすつね。

来問 女性が元気で、面白そうと思ったやりたいことは、結構自由にやらせてもらえる、楽しい職場ですよってことで。

一同（笑）

伊波 自分が読者の声を直接聞いて、本社に伝えてくれることもよくあるよね。

森山 私は販売第一部で、販売店の管理指導をしています。毎月、販売店が扱う部数の増減の要因を店主さんと話し合っ、必要なときはアドバイスしたり指導したり。

銘苅 販売政策にどんな意義があるか、販売店さんに説明したりもするよね。

森山 来問さんの部署が考えた販促キャンペーンを販売店さんにも協力してもらって

います。本社と販売店はメーカーとディーラーの関係。販売店が元気じゃないと本社の元気もなくなる。販売店の意見も取り入れながら、二人三脚で一緒に頑張ろうって感じですね。

伊波 販売店が読者の声を直接聞いて、本社に伝えてくれることもよくあるよね。

森山 販売店が苦労して取った1部の話を聞くこと、私たちもうれしい。逆に、本社の対応が原因で部数が減ったりすると販売店さんにすごく恨まれますよ（笑）。1部の重みを肌で感じられる仕事ですね。

来問 あと、うちの局ってみんなでカバーし合えるから、休みが取りやすいってのも言えるよね。育児中の男性社員もいるし。

滝本 それは全体的に言えると思う。

銘苅 確かに、編集にいた頃と比べると時

本社と販売店の関係はメーカーとディーラー。二人三脚で頑張ってます。
販売第一部
森山 幸
[2005年入社]

数字とらめっこの仕事。ミスすると読者に新聞が届かないので緊張感あるよ。
管理部
伊波 夕子
[2000年入社]

コンクールの合格発表で泣いて喜んでる子を見ると事業の価値を再認識しますね。
文化事業推進部
銘苅 つばき
[2005年入社]

社会貢献事業が多いのは新聞社独特なんだよね。収益重視ではできない。
読者事業部
滝本 兒子
[1999年入社]

将棋大会がやりたい。新聞社が裾野を広げることで突出した才能を発掘できる。
読者事業部
来問 信也
[1995年入社]



①新報幼児画コンクール表彰式 ②あやはし海中ロードレース大会 ③メサイア演奏会 ④おきなわマラソン ⑤琉球新報国際バレエコンクール ⑥新報児童オリンピック大会 ⑦琉球新報こどもまつり ⑧新春を奏く「歌い初め・舞い初め・華舞台」⑨きのわん車いすマラソン大会 ⑩全日本トリアスロン宮古島大会

04

経営戦略局

新聞社の未来切り開く挑戦。

- 経営企画部
- 新社屋建設室
- システム開発チーム
- Rプロジェクトチーム
- りゅうちゃんクラブ事務局
- フォトサービス・データベース

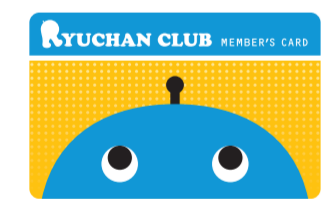


企画力生かし 新規事業続々開始

Rプロジェクトチーム

情報発信力と収益力アップを目指し、2016年の組織改編で誕生した「Rプロジェクトチーム」。ウェブマガジン「琉球新報Style」やクラウドファンディング「YUIMA」、旅行者に講座を開く平和発信事業などの新規プロジェクトを次々と立ち上げています。

新聞社の持つ信頼性の高い情報を時代に合わせた形で発信すること。ニーズを読み、これまでになかった新たなサービスを創出すること。社会をつなぐ役割を担ってきたメディアとして、これからも力強く取り組んでいきます。



楽しい！うれしい！ 琉球新報の会員組織

りゅうちゃんクラブ

会員組織「りゅうちゃんクラブ」の事務局は創設10周年の節目に向けて、読者サービスのみならず新たな事業展開を見据え、読者事務局から経営戦略局に統合されました。会員数6万人超の組織力を生かし、さまざまな企業と連携したイベントも展開しており、今後も経営戦略の柱となります。

お得なサービス提供で琉球新報ファンを増やすだけでなく、地域をより楽しく元気にしたい。紙面やウェブとも連動して、生き生きと沖縄を盛り上げていきます。



新聞って堅そう、難しそう、「おっさん」の読み物——。そんなイメージが故に、新聞を敬遠している人もいるのではないかな。必要な情報が本当に必要な人に届いているの

「若者に届く発信力で
新聞のイメージを
ガラリと変えたい。」

だろうか。

そんな疑問や思いから「新聞や新聞社のイメージを変え、女性や若い世代にも響く情報を発信したい」とチャレンジを始めたのが、2016年7月にオープンしたウェブマガジン「琉球新報Style」です。

琉球新報Styleでは、日々の暮らしに役立つ情報や多様なライフスタイルを応援するコンテンツを盛り込んでいます。沖縄ちゃんまげ系アーティスト「まげひらさん」の映像でニュースや話題を届ける「木曜のまげひらNEWSでGO!!」や、日々の紙面からのお得な情報、外部ライターと連携した企画「沖縄美人」など、「沖縄の毎日をちょっと楽しく新しくする」ことがコンセプトです。

新聞社では今、ウェブを含めた多様なメディアを生かした情報の発信力が求められています。沖縄のこと、地域のこと、未来のことを「わたしたちごと」として、読者と一緒に考えるきっかけをつくりたい。そのための情報をどうやって届けるか。一緒に考えてみませんか？

Rプロジェクトチーム・「琉球新報Style」担当

座波 幸代 [2001年入社]

社歴／編集局政経部－運動部－社会部－南部報道部－NIE推進室
マイブーム／カレー

5.8%。何の数字がわかりますか？ 沖縄県の人口に占める80歳以上高齢者の割合です。沖縄戦を体験し、その記憶を語ることができる世代と言い換えることもできます。

沖縄の戦後は、戦争体験者がそのつらい体験を語ることで、何とか「平和」が維持されてきました。しかし、戦争体験者は高齢化し、いずれいなくなってしまう。

これまで多くの体験者が孫ほどの年の離れた記者たちに、自分の人生の中で一番苦しかったこと、忘れたいのに忘れられないことを話してくれました。

たくさん証言を取材してきた私たちができることって何だろう？と考えたときに、紙に書くだけでなく、直接話して伝えることも大事な役割の一つだと気付きました。

2016年度から旅行社と連携し、修学旅行生や一般旅行者に沖縄戦や基地問題をはじめとする沖縄で起きていることを記者が伝える事業をスタートしました。新聞社の財産は「人」。そして「つなぐ力」です。個性あふれる記者たちが取材で感じたこと、記事では伝えられなかったことを話すことで、平和の輪が少しずつつながっていくと信じています。

「戦争体験者の証言を
ずっと取材してきた
新聞社だからできること。」



Rプロジェクトチーム・平和発信事業担当

玉城 江梨子 [2004年入社]

社歴／編集局運動部－南部報道部－社会部－北部報道部
社会部－調査オビニオン－社会部
マイブーム／パクチャー

「夢を実現したい人と
応援する人を結んで
沖縄盛り上げよう！」



面 白い人を取材して、「近くにこんな人がいたんだ」って驚いてもらう。地元企業が作った新しい商品載せて、「こんなのが欲しかったんだよな」って気づいてもらう。メディアの役割はそうあるべきだと思っています。だから、琉球新報社はもう一歩踏み出しました。

沖縄銀行さんとつくった購入型クラウドファンディングサイト YUIMA (ユイマ) が目指すのは、夢ある人と支援したい人を結ぶこと。そして地域とともに沖縄の課題解決を目指し、新しいビジネスや商品と一緒に作り出すこと。沖縄の魅力ある文化や伝統を盛り上げ、経済や地域の活性化につなげる

こと。琉球新報社には新聞やウェブマガジンという、メディアとしての発信力があります。夢や目標を実現したい人がいるのなら、その強みを生かして一緒に資金と応援団を募ろうと思っています。掲げたビジョンは、より良い沖縄を地元の方々と一緒に目指すこと。

YUIMA は「地域に必要とされ続けたい」と思う、そんな地方紙の新しい取り組みです。

Rプロジェクトチーム・クラウドファンディング「YUIMA」担当

久田 尚志 [2007年入社]

社歴／編集局政経部－編集局運動部－広告局営業部－営業局広告部
マイブーム／健康な体づくり（椅子代わりのバランスボールもその一環）

「みんなをつなぐ あしたにつなぐ」をテーマにした琉球新報の会員制組織「りゅうちゃんクラブ」はことし10周年を迎えました。読者だけでなく、18歳以上の方なら誰でも無料で入会できます。会員は約6万人、720店（2017年2月現在）が加盟しています。「琉球新報とつながるとちょっとお得」と思ってもらえるような、会員の皆さんに笑顔を届ける情報発信を目指しています。

マスコットキャラクター・りゅうちゃんの会員証の提示で同クラブの加盟店で割引などの特典が受けられるほか、社のイベントの優待もあります。月2回の特集紙面では琉球ゴールデンキングスホームゲーム招待などのプレゼントや投稿コーナー、お笑い芸人まーちゃんの痛快コラムを掲載、会員向けメルマガも発信しています。

各局の社員で構成する読者クラブ委員の

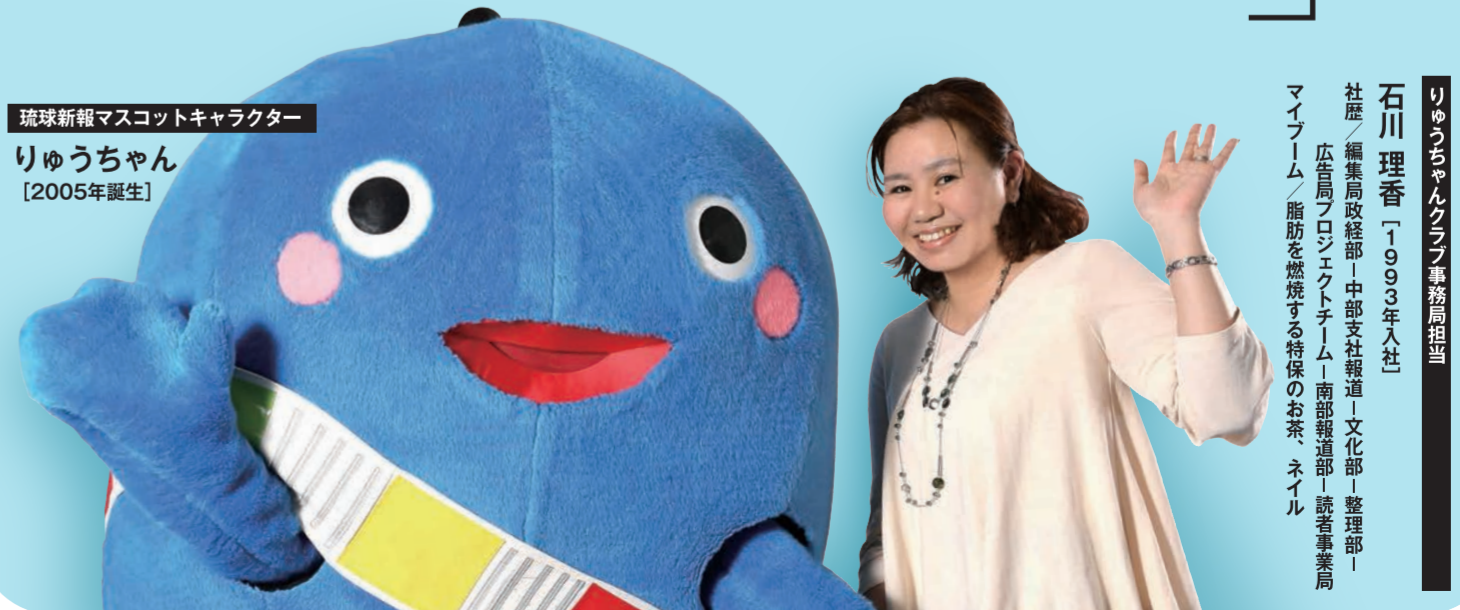
「参加したい」「あったらいいね」という声から映画試写会やキングス応援バスツアーなどの企画につながっています。

同業他社にはない、沖縄の地元紙だからこそできる、会員と加盟店の皆さんをつなぐ懸け橋でありたい。より魅力のある企画・情報発信が課題です。「いいね りゅうちゃんクラブ」を広げる、あなたのユニークなアイデアを求めています。

「みんなをつないで『いいね』の輪を広げりゅよ♪」

琉球新報マスコットキャラクター

りゅうちゃん
[2005年誕生]



りゅうちゃんクラブ事務局担当
石川 理香 [1993年入社]
社歴／編集局政経部－中部支社報道－文化部－整理部－
広告局プロジェクトチーム－南部報道部－読者事業局
マイブーム／脂肪を燃焼する特製のお茶、ネイル



那覇市泉崎の新たな ランドマークに

新本社ビル2018年春完成

観光都市・那覇のメインストリート、国際通りを見守る沖縄の新たなランドマークに。琉球新報社は2018年春、那覇市泉崎に新本社ビルを移転します。

新本社ビルは地上11階、地下2階建てで、定員600人余のホールを設け、伝統芸能や文化・芸術の発表の場とします。1階の屋外部分を公開空地（くうち）として一般に開放し、市民に交流と憩いの場を提供。地域に密着した沖縄の情報発信拠点としてさらなる強化を目指します。

外観は「帆船」をイメージし、東京スカイツリーの照明をデザインしたシリウスライティングオフィス（東京、戸恒浩人社長）が外観照明を設計。夜も輝く建物として那覇の街を彩ります。

沖縄から世界へ、世界から沖縄へ。アジアの中心に位置する沖縄の地理的優位性を生かし、国内外のイベントやコンテンツを発信する「感動の懸け橋＝階（きざはし）」となりたい。地域情報から観光、経済、政治などさまざまな情報を集約して届けていきます。

激動の時代を生き抜き、今に生きる人々の喜怒哀楽を記録し続けてきた琉球新報。戦前から引き継がれてきた「紙ハブ」精神の下、創刊123年にわたる気概を引き継いで、次世代に継承します。

05

印刷局

鮮やかな紙面生む技術力。

印刷部



就活生へエール!
うえま・けいすけ [2006年入社]
■出身：沖縄県名護市
■社歴：印刷部一技術管理部
■趣味：フットサル
■オフの過ごし方：休みの前日に飲みに行くことが多いので、休みの日はだいたい二日酔いでダウン。そうでない日はフットサルをしています

またまた新聞社は元気です。入社したあかつきには、一緒にがんばりましょう。

輪転機安定稼働のために細心の注意

上間 敬左 ■ 印刷部

印刷部では、新聞を印刷する輪転機のオペレーション(操作)業務と、メンテナンス(整備)業務を主にしています。

メンテナンス業務はとても重要で、輪転機の機能を安定的に保持させるためにさまざまな整備項目があります。整備を怠ると輪転機に不具合が発生し、印刷ができなくなります。印刷ができないということは、新聞発行がストップするということです。ですから、細心の注意を払って業務にあたっています。

オペレーション業務は新聞印刷に使用するインキと水の調整作業や、印刷されて輪転機から搬出された新聞の体裁を整えるまでの一連の作業全般です。

オペレーションでは特にインキ調整が大変です。記事中の写真や広告の色を忠実に再現するよう、指定された印面に近づけるために緊張感をもって作業しています。

輪転機では本紙の他にも「新報スポニチ

や副読紙の「週刊レキオ」「週刊かふう」、各種別刷り特集や、受託印刷の「日経新聞」「日本農業新聞」などを印刷しています。

ちょっと専門的な話になりますが、昨年、印刷で使用するプレートが無処理版CTPに全面移行した際にCTP機能の再点検を行って、スポニチ印面の出力位置調整で発生していた余分な印刷資材費を軽減することに取り組みました。そのことが高く評価され、局長賞を授与されました。経費節減に貢献することができ、その努力が認められたことは、大変励みになりました。



1. 印刷局はシフト制で緊張感ある職場ですが、雰囲気は明るい。一息つけるときには、先輩方とよく冗談を言って笑っています
2. 印版を超高速度タワー型輪転機に装着。四つのオフセット輪転機を重ねた構造で高さは20mあり、6階建てのビルに相当します。4色(シアン・マゼンタ・イエロー・ブラック)の印版をそれぞれの輪転機にセットします
3. 折機から毎時15万部のスピードで折りたたまれた新聞が出てきます
4. 折機から出た刷りたての新聞は、すぐに全員で開いて確認。ページ建てに誤りがないか、色はちゃんと再現できているかなどをチェックします



昼の業務で受託印刷している新聞や副読紙、朝刊業務で本紙やスポニチを印刷している

06

総務局

社員と社会を支えます。

総務部
経理部
人事部
保健室
読者サービス室
新聞博物館



社員が生き生きと働ける環境づくり

健康を守るセミナーや支援を充実

健全な企業活動を続けるためにも、社員が生き生きと働ける環境を整えることは不可欠です。総務局では各種制度で育児・介護など人生の様々なステージにある社員をサポートし、福利厚生を充実させ、社内セミナーなどで社員の心と体の健康を守る取り組みを行っています。

沖縄には「命どう宝」、命こそ一番大切なものだという黄金言葉があります。どれだけ仕事に打ち込み結果を出しても、自分の健康を

疎かにしては幸せとは言えません。琉球新報社は社員の命、健康を第一に考え、県が実施する健康長寿おきなわ復活を目指す支援事業にモデル企業として参加。県の助成を受けて「肩こり・腰痛セミナー」や「食生活診断」などを開き、社員の健康増進を図っています。また独自の取り組みとして、社員が1日1万歩以上のウォーキングに挑戦し、達成すると商品券が贈られる「チャレンジ賞」や、女性社員限定のヨガ教室なども実施しています。

これまで開催した数々の健康セミナー。左から「ゴルフの飛距離を本気で伸ばすセミナー」「管理栄養士による食生活診断」「肩こり・腰痛セミナー」。いずれも希望者は業務時間内に受講することができる。右は毎週水曜夕方6時から女性限定で開催している「ヨガ教室」。体が芯から温まり、体調が整うと好評だ

子どもたちの未来に希望の種まきを

琉球新報社のCSR活動

琉球新報社は2016年1月から沖縄県共同募金会と連携して「りゅうちゃん子どもの希望募金」を始めました。県内では、平均的な所得の半分以下で暮らす「貧困」世帯の子どもたちの状況が深刻さを増しており、募金活動による子どもの育ちと学びを支援する取り組みを広げています。集まった募金は県共同募金会を通して、子育て世帯と子どもを支える取り組みを行う民間団体に助成。第1期は3カ月間で911万585円の善意が寄せられ、

生活困窮世帯の一時生活支援などにあたる25団体に助成しました。また、経済的理由で大学進学が困難な生徒に対し月額5万円を支給する給付型奨学金制度「琉球新報奨学生」を2016年9月に創設しました。報道で問題に光を当てただけではなく、県紙として社会を支える役割を果たす。子どもたちに希望を与え、沖縄の未来に種をまくため、「りゅうちゃん募金」とともに今後も継続してまいります。



1. 給付型奨学金「琉球新報奨学生」募集ポスター 2. 「りゅうちゃん子どもの希望募金」のシンボルマーク

給与

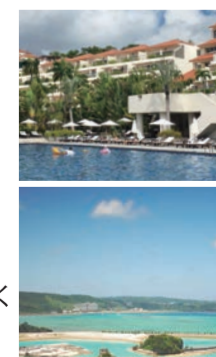
- 基本給/200,100円(大学卒、2016年度実績)
- 諸手当/家族手当、単身赴任手当、地域手当、住宅手当、取材手当
- 交通費/35km圏内まで全額支給(一部対象外)
- 補助/支社勤務者の家賃補助等
- 賞与/年2回(夏・冬)
- 昇給/年1回(4月)

勤務時間・休日・休暇など

- 勤務/1日8時間(7時間勤務・1時間休憩)
- 休日/年間106日
- 休暇/年次有給休暇、特別休暇(夏休み、結婚など)、産前産後各8週
- 育児休業制度
子どもが3歳になるまでの間、最長1年6カ月(過去11年で女性36人、男性11人が取得)
- 介護休業制度
要介護状態1回につき延べ1年

福利厚生

- 保養施設
「カヌチャベイ&ヴィラス」「リゾネックス名護」「恩納マリンビューパレス」
- 財形貯蓄制度
- 新入社員支援制度
- 次世代育成支援法に基づく認定企業
- 県ワークライフバランス推進認定企業



(上)カヌチャベイ&ヴィラス(下)恩納マリンビューパレスから臨む西海岸

社長と座談会

ぶっちゃけどうなの、琉球新報

「ニュースはスマホで事足りるし、紙メディアなんていずれ絶滅するでしょ」。そう思われているのは私たちが一番よく知っています。でも、それって本当にそうなの？ 琉球新報で働く記者と総務のスペシャリストが富田詢一社長を囲んでぶっちゃけ座談会を開催。記者のリアルも新聞の未来も、これからの私たちの働き方も本気でホソネで語り合いました。琉球新報の中の人たちの思いよ、若者に届け！

1 記者の仕事って大変？

—いい感じの会社に見えるように、ざっくばらんな座談会を開きました。

富田社長 (以下**富田**) いい感じで…。

仲井間 一応、いい感じの会社なんだけど、外部にはうまく伝わっていないよね。

新田 新聞社はやっぱり厳しくて堅いというイメージだと思う。

富田 昔はよくそう言われたけど、今もそうなのかな。厳しい方が仕事としてはやりがいがあるんだよ。ある程度の困難さがあるからこそ、克服した時に達成感や幸せな

気分になることができる。ただ会社にいて給与ももらえて、それで幸せかって言ったらそうではないだろう。

沖田 新聞社は局が違えば別会社のように業務内容や環境が違ふ。そういう組織にお

新聞記者は正直キツイ。でもそれを越える魅力がある

いて共通する良い人材って、なかなか難しいのかなあって気もするけど。

富田 そうでもない。原点はざっき言ったように、ある程度の困難さを克服した時に達成感やハッピーな気持ちを持つことがで

きるかどうかだと思うよ。編集が特に大変で、総務や営業は楽だというわけではない。逆のケースだってある。

仲井間 確かに。でも私は正直、記者の仕事はとっても大変だし、世界で一番寝起き

がストレスfulな仕事だと思っています。

富田 若い証拠だ (笑)。

仲井間 毎朝5時に朝刊開いて他紙に抜かれていないかチェックして、休日も紙面次第で一変するし、この生活がずっと続くの

かと最初の頃は絶望的になった。でもなぜ続けられてきたんだろうって考えたら、「記者」の名刺1枚で大臣や首相にも疑問をぶつけることができるから。それを醍醐味に感じているから辞めずにこれた。一番リラックスできるのは飛行機の中ですね。携帯電話がつかからないから (笑)。

富田 最近はWi-Fiがつかがるよな (笑)。

仲井間 そうなんです…。ストレスfulな仕事であることは否定しない。そこはハッキリと若い人にも伝えたいと思う。でも、それを越える魅力を感じられたら、とても充実した仕事。まあ私も就職活動してた時点で分らなかつたですけどね。

●おきた・ゆうご
2006年入社。編集局社会部警察担当キャップ。琉球新報労働委員も務める超多忙な3児のパパ

●なった・よしの
2001年入社。総務局総務部所属。4人の子育てと仕事を両立するパワフルウーマン。仕事も口調も早い

●なかいま・いくえ
2006年入社。編集局整理グループ所属だが、現在は労働専従。果てしない「妄想力」の持ち主



（沖田育吾）



（新田佳乃）



（仲井間郁江）



（富田詢一）



（佐藤ひろこ）



（稲福政俊）

●とみた・じゅんいち
1977年入社。事業局長、編集局長などを経て2010年から取締役社長。社員の誕生日をウクレレで祝う

●さとう・ひろこ
1997年入社。企画力を買われ経営戦略局Rプロジェクトチーム配属。新しい新聞社の形を日々模索中

●いなぶく・まさとし
2005年入社。社会部所属。リオ・オリンピックと並行して世界のウチナーンチュ大会も取材したタブカイ

2 琉球新報社の社風は？

稲福 意外なほど琉球新報は世界で知られていますよ。パラリンピック取材でブラジルに行ったら、リオの小さな島にも琉球新報を知っている人がいて「なんなんだこれは！」って (笑)。ウチナンチュ (沖縄人) は世界に広がっているし、名刺があれば、まさかと思うような人に会えたり「こんなところにこんな人いたんだ」って発見したり。意外と海外出張行かせてもらえるし。

沖田 僕は県外出身なんですけど、3年間宮古島支局に勤務したんですよ。完全な異文化の地域に溶け込みつつも一体となるわけではなく、第三者として観察する生活が面白くて。社会部で警察担当として「切った切られた」の世界が長いけど、あの経験も踏まえると、これだけ野次馬根性が許される仕事ってなかなかない。野次馬っていう意味では、今の時期 (2月中旬) は社内人事に皆ものすごく関心が集まって、社内での取材活動が活発になるし (笑)。

—同 そうそう！ (笑)

沖田 「あいつは今度はどこそこに行くらしい」とか情報が飛び交っているって、同

年代の友人に話すと「あり得ない」って言葉ちやうって。

富田 本来はおかしいよな (苦笑)。

佐藤 私も県外出身だけど「琉球新報の記者」という立場だから、県外出身者であっても心を開いて本音を話してもらえるのは魅力。地域に根を張って、沖縄の魅力も課題も地域のみならず一緒に考えていける。

富田 新聞社の役割は、社会的弱者への平等さを正す、人権を守る。そこが原点。報道機関として持続していくには、経営が

やりたいことができ、野次馬根性も許される (笑)

自立・独立していないといけない。購読者を増やしたり、広告主を増やしたり。何のためかというと、偉い人に話を聞いていただくためだ。偉い人、権力者の側に立って報道してはダメなわけ。弱者の側、県民の立場に立っている人々と話をし、掘り起こすのが仕事。それができるのはえてくれる読者やスポンサー、つまり県民がいるからだ。県民の支持を得られないことには新聞発行はできない。県民の共感、理解を得るために仕事をしているんだと思うよ。

稲福 社長が入社した時は、琉球新報はどんな雰囲気だったんですか？

富田 チームでの取材がほとんどで、何かあるたびに飲み会してたな。ほぼ毎日。若い人は買い出しに行かされて、後片付けさせられて…要するにパシリ。だけど先輩たちに教わる部分も多分にあった。先輩も何かを教えようと思って飲むわけではないんだけど、自分の体験や感じていることを包み隠さず話すというか。「こんなすごい人たちでも悩みがあるんだ」って感じるのができた。特に若い

んだ…」って、気が重くなるというか、レッシャーというか。

沖田 確かに、入社して10年以上経った身としては、自慢しなくなる気持ちも分かるよ。ただ僕は成功体験の数が少ないから、レパートリーは尽きかけているけど (笑)。

佐藤 私は営業、編集、今は経営戦略局と、いろんな部署を経験したけど、それぞれの場所で「これをやりたい」と思って提案した仕事は、かなりやらせてもらった。入社2年目で東京支社の営業担当だった頃、どうしても「慰霊の日」関係の企画広告で記事が書きたくて、提案してみたらやらせてもらった。この会社の良いところは、やりたいことがやりやすい、ゆるいところだと思う。

富田 「ゆるい」という表現がいいのかどうか…。「寛容」って言うってほしいな。「ゆるい」の方が今の若い人にはウケるのか？

稲福 俺も1年目の時に深夜はいかの連載をやるうって話になって「こんなやりたいたいんですけど」って言ったら、すんなり通った。ただ、1年目で何も分からない状態で、取材した日の翌日付から連載を始めるという、かなりのハードモードだった。後日めっちゃ怒られたけど (笑)。まあ、確かにやりたいことはできますね。

4 働き方は今後どうなる？

佐藤 若者の価値観も変わってきているという意味でもう一つ。働き方改革。

—同 そのま、ぜひ触れておきたいですね。

新田 定年まで勤めるとして約40年。人生の半分を会社と歩むことになるんです。人の考え方やライフステージってどんどん変わる。40年の間に仕事に注力できる時と、どうしてもできない時期もある。私も子どもが4人いて、寝る時間以外自分の自由な時間がない。でも社が環境整備してくれたから4人全員母乳で育てて、働き続けられている。私はたまたま結婚・出産という選択をしたけど、どんな人も40年一緒に歩んでいける会社であれたいと思います。

佐藤 育児や旧姓使用など恵まれた環境で仕事をさせてもらってはいるんですけど、「子どもがいることを言い訳にはしたくない」という思いもあって、女性にとって報道現場は厳しい環境だと思うんです。出産後に記者として復帰したんですが、現場には女性の先輩も少なくなくて、後輩たちへ道を拓きたいという思いもあり、がむしゃらに働いてきました。夫の協力でなんとかやっ

てきたけど、子どもと向き合う時間がないという後ろめたさもあった。でも仕事は全力でやりたいし、ずっとどこかでモヤモヤしてて。ある夜、遅くまで残っていた時に仲井間に「私は子どもを産んでも佐藤さんみたいな働き方はできないし、したくないです」ってボツリと言われたの。

仲井間 ああ〜、言いました。

佐藤 それがすごく心に残っていたのね。周りの女性記者も子育てと仕事の両立で同じように悩みを抱えていて、働き続けるた

多様性のある組織で、その人本来の力を育てたい

めに記者の働き方も変えていかなくてはならないなっていうことばかりじゃなく、多様性がある組織にしていきたい。富田 会社には完成した人が入社しては読んではいけない。未完成の人が集い、皆で少しずつ成長して、社会人としても家庭人としても一皮、二皮向けて、良い社会を作ることができるのかなと思う。細胞の「オートファジー」ってあるだろう。人間の体は生きていくために悪い細胞を食べて、再生していく力があるらしい。そういう力が発揮できるかどうか環境によってずいぶん違ふだろうから。人間が本来持っている力を育てる、伸ばすことができる環境にしたい。

正疑問もあります。特に記者の仕事は情報を取ってくることだから、こちら側でスケジュールをコントロールできない。夜は仕事しないとか決められないし、情報も1日置くと古くなる。そう考えると「もっと深く、もっと知りたい」と突き詰めていくタイプの人が長時間労働になる。在宅だったらそれが防げるということにもならないだろうし。

富田 在宅勤務ですべて解決するとは思っていない。特効薬はないが、とりあえず1歩、2歩、進んでみることだ。1人に負担感が重

くのかかっていくことだけは避けたいといけない。それはやっぱり経営の仕事だよな。

稲福 入社する時に、ある人に「マイホームパパは良い記者になれない」と言われたことがあるんですよ。

—同 え————！

稲福 その時は「ああ、そうなんだ」って思って、必死にやってきましたんですけど。

仲井間 稲福はどんなり越えただですか？

稲福 そこはもう折り合いつけずに、家庭は置いていって感じ。その発言をした人は幹

部クラスの人だったから「ああ、そうなんだ」って思い込んだ。だから、逆のことを言うてくれる人がいたら、若い人も安心して進んでいけるのかなあって気はする。

—今だったらマイホームパパは良い記者になれると思いますか？

稲福 なる！ これは言い切れる。

佐藤 新聞っていろんな問題にアプローチしなくちゃいけないし、いろんな人に読んでもらいたいじゃないですか。様々な生き方や背負うものがある人たちが、責任を持って生き生き働いている、そんな新聞社が作る新聞はきっと良い新聞になるし、それが県民に伝わるものを作ってほしい仕組みなんじゃないかと。多様性がある組織にしていきたい。

富田 会社には完成した人が入社しては読んではいけない。未完成の人が集い、皆で少しずつ成長して、社会人としても家庭人としても一皮、二皮向けて、良い社会を作ることができるのかなと思う。細胞の「オートファジー」ってあるだろう。人間の体は生きていくために悪い細胞を食べて、再生していく力があるらしい。そういう力が発揮できるかどうか環境によってずいぶん違ふだろうから。人間が本来持っている力を育てる、伸ばすことができる環境にしたい。